

あれこれ

2016年 第2号
担当：天童支部



★山形県建築士会女性部委員会では入会者募集中です！建築はまだまだ男社会、たまに女子会しませんか？★
★問い合わせは 山形県建築士会へ ☎023-643-4568 <http://www.yamagata-ken.org>★

平成28年度 第26回全国女性建築士連絡協議会

H28.7.22(金)～23(土)

全体会

7月22日(金)より2日間に渡り「平成28年度 第26回全国女性建築士連絡協議会」が奈良県にて開催され、全国から約370名、山形県からは8名が参加しました。テーマは「未来へつなぐ居住環境づくり」～日本の暮らし 豊かな生活文化の再発見～です。当日、山形空港を出発し会場の奈良女子大学へと向かいました。現在も大学の玄関口として利用されている正門は国の重要文化財に指定され、その風貌とともに歴史の重みを感じさせる佇まいです。会場入り口では全国から集まった会員の方で込み合う中、東北ブロック会でお馴染みのメンバーにも会い、皆この会を楽しみにしている様子が伺えました。



記念館前にて。記念館は、奈良女子大学を象徴する建物です。

開会式は、日本建築士会連合会の三井所清典会長の挨拶に始まり「女性は男性の5倍の受信力と発信力がある。今回話し合われる内容を地元を持ち帰って広く発信して欲しい」と励ましの言葉を頂き、また女性委員会の永井香織委員長の挨拶からも、この会に掛ける意気込みと、会場中に広がる女性のパワーが感じられ、気持ちが高ぶりました。



正門(国の重要文化財)と記念館



正門附属の守衛室(国の重要文化財)

渡辺光雄 岐阜大学名誉教授による基調講演では、今回のテーマに沿った

「女性の力で『発見』から『創造』へ」と題し、ご講演頂きました。住まいから和室が消えつつある現在ですが、日本人ならではの床に座る暮らし方や、和室と縁側、庭との関係性、季節感を室内に取り入れるなど、日本の家の良さ、豊かな生活文化がつけられている事を認識し、和室建築から継承すべき伝統技術を学び、日本の住文化・生活文化史を俯瞰的に捉えて、今後の住宅像を創造するという内容でした。女性ならではの感性でものをみる大切さ、私たち建築士はどのように捉えて設計活動をすべきか、多くのヒントを頂くことができました。

その後のパネルディスカッションでは、女性委員会が実施した和の暮らしへのアンケート結果などを通じて、和の暮らしの快適さや、受け継ぐべきものについて意見を交わしました。和室生活の無い体験から、和室には堅苦しい印象を持つ大学院生、床座の生活が与える人間の回復力を提唱する医学療法士など、それぞれの立場から活発な意見が述べられました。日本の暮らしから和室が減少し、また建築士の和室に対する知識低下が問題に取り上げられましたが、今後の私たちの活動が大切なことを認識させられました。パネルディスカッション後は、東北、九州の震災被災地からの報告会も行われました。



開会式 三井所会長のあいさつ



基調講演をする
渡辺光雄岐阜大学名誉教授

「乾杯！」で始まった交流会は奈良県の皆さんのおもてなしを受け、「民話サロン」の会から奈良県にまつわる民話、「せんとかん」の登場などのサプライズもあり、おいしい料理と地酒で大いに盛り上がりました。

(小鷹 貴子/次ページへつづく)

二日目は、会場を奈良春日野国際フォーラム薨に移し、分科会と全体会が行われました。分科会は、8分科会に分かれて意見交換。それぞれが参加した分科会の報告をします。

分科会 H28.7.23(土)

■B分科会「エネルギーとくらし」

天童支部:小鷹 貴子

京都の会員による「省エネと自然の移ろいを感じる家」と「平成の京町屋」の実例発表。省エネ住宅では、昔からの竹木舞の代わりに木木舞を使った木刷り工法もあり、軒の出、中庭の配置等、機械に頼らず自然の恵みを最大限にいかす為の建築的な工夫もされていて非常に興味深いものだった。

また、それを検証、データ化し、次世代に引き継いでいくこともされていた。個人の感覚でしか表されなかった事をデータ化することで、より説得力のあるものになっていた。平成の町屋は、実際の町屋で子供たちが打ち水、蚊帳、怪談話など、夏のしつらいを体験し、昔からの暮らし方を五感で感じてもらうという発表だった。暮らし方の知恵を知り、感じることの少なくなった季節感を町屋を通じて体験してもらう大切な試みだと思う。

■D分科会「環境共生住宅～住み継ぐ～」

山形支部:原田 江美子

空き家問題が顕在化する中、岡山県では10年継続アンケート「中古住宅に対する意識調査」を行っている。また、徳島県では全国初『空き家判定士』制度を設け利活用の可否判断をしている。

空き家になってからではなく、空き家にならない話し合いが大切。

■E分科会「景観まちづくり」

酒田支部:小山 恵子

分科会参加者は35名、コメンテーターは石川県七尾市のまちづくりの事例を発表した。七尾市は小丸山城を中心に、2度の大火に見舞われるも比較的古い町屋が残り、商人町と職人町に分けられ、現在に至る。住民達の結束は、青柏祭や結婚式などに発揮される。七尾市は北前船の湊町だが、同じ酒田の街並みとは違い、隣との距離も近く卯建で火災を止めた平入りの家並みになっている。市民に七尾市の財産である街並みを再認識して貰おうと「七尾街並めぐり」を行ったが子供達を動員させた事が成果を上げている。

分科会に参加するには3つの方法がある。1は聞くだけ、2は意見を言う、3は資料を作成して持ち込む方法である。山形県のまちづくりとして、天童市の民間主導の規制が強いまちづくりと、緩やかな100年計画の金山町のまちづくりを選び資料作成した。資料がある事で、記憶に残ればと考えている。



交流会にて「せんとかん」と一緒に記念撮影!

■F分科会「子どもと住環境」

山形支部:齋藤 尚子

群馬県の発表は、2つの親子向けワークショップ。1つはペーパークラフト「紙ぶるる」を作成して、筋交いについて知ってもらい、安全な家を考える。2つ目は菓子の家づくりで、確認申請から検査済証発行までを行い、建築士の仕事を知ってもらう内容。どちらも親子の関心は高く好評だった。集約方法は、公共のイベントにコーナーを設けた。

また、北海道では高校の家庭科住居分野の授業に参加し、高校からの申込が増えたと同時に、建築士会会員の参加が増えて、全土の活動になりつつある。

■G分科会「高齢社会と福祉住宅」

鶴岡・田川支部:齋藤 美恵

認知症と高齢者のための住宅改修事例について2事例の報告があり、参加者の皆さんと意見交換や情報交換を行った。

1例目は認知症の高齢者と同居するための増築で、単純な動線かつ家族とコミュニケーションが取れる間取りに改修したところ、ADLが改善され自分でできることが増えた事例が報告された。

2例目は脳梗塞と高次脳機能障害を併発した夫を妻が介護するための改修で、老々介護の負担を軽減するため段差解消、バリアフリー化等を考えた事例が報告された。住宅改修を行うにあたり、建築士として医療・福祉分野と連携することは大切だが、人間関係・家族関係・生い立ち・性格など多くの周辺状況が関係しているため、一般論や医学的なスケールだけで測ることはできない。

設計にあたっては個人差を考慮すること、本人と生活環境の状況を把握し状況の変化にどのように対応するか検討すること、本人だけでなく家族の満足にも繋がることなどを建築士の立場でよく考え、判断して改修計画を進めていくことが大切であることを学んだ。また、現在の介護保険の改修補助では在宅介護のための改修費用には程遠く、もっと助けになるような制度を望む声や、改修工事において仕上げ材等を選定する際の諸注意など聞くことができた。

■H分科会「二地域居住の提案」

西村山支部:大泉 みどり

(週末は信州で暮らそう)を合言葉に、個性豊かな信州の気候風土に合わせて、それぞれの地域に暮らし地域をよく知る若い建築士が、おもてなしの心を込めてプランを作成した。

豊かな自然環境、美しい景観、おいしい食べ物、伝統・文化・風土が重なり合った地域の魅力を引き出し「二地域居住者向けコンパクト住宅」13プランの提案を冊子にまとめ、東京銀座のアンテナショップで公開プレゼンを行ない誘致している事例。もちろん地域にあった住まいと暮らし方をきちんと理解してもらって居住へ導くことも責務である。当然のことながら、これらのプランには県産材が多く使われている。

都会の生活には限界を感じているけれど田舎に引っ込むことにも抵抗がある。そんな思いに答えて、生活と仕事の軸足を双方に置く手段として、住まいと仕事の拠点を東京と田舎の両方に持てる「二地域居住ライフ」の提案。家庭菜園、山登り、雪を楽しんだり、平日と週末であったり、二地域の移動はそれぞれで、ネット利用の職業の家族、自然に囲まれた環境で子育てを望む家族や、退職後の御夫婦などにニーズがあるようだ。

居住地でのコミュニティづくりや人、地域とのつながり、事業や祭りとの関わり等の支援も行なっているとのこと。この活動は、平成26年より始めて需要はまだ無いようだが、現在はリノベーションの古民家を利用した「二地域居住ライフ」型の協同オフィスなどがあるそうだ。



布穀園の「まほろばランチ」



奥が「夢殿」



ガイドさんの説明も熱い!



心のコもった手づくりの名札。
この名札で所属士会、分科会など
全てが表現されています。
エキスカッションは紐の色で。

協議会を終え、今回のテーマを通して話し合ったこと、考えさせられたこと、様々な思いが込み上げてきました。「日本の暮らしから学ぶべき事はもっとあるはず。」この学ぶ姿勢、それを発信する姿勢を忘れずに、今後活かしていきたいです。

二日目の午後は、大人の修学旅行「斑鳩の里めぐり」法隆寺をメインに古都奈良を堪能しました。

(小鷹 貴子 写真共)



西岡棟梁の道具

「建物再生、温故知新。古きを訪ねて、新しきを創る。」日本では「一生に一度の大仕事」と称して住宅の多くが解体して建て替えられてきました。その上、解体材のほとんどがゴミとして処分されてきました。それが現在は、空家問題や産廃問題などが出てきて、住まいは手入れをして住み継ぐことが求められてきています。また、歴史的建造物は残していかなければならない！という風潮も出てきました。今大会においては、基調講演の後に各県から改修事例とその取組についての発表が行われました。

山形県は芝田委員長が「リノベーション(まちキネ)プロジェクト」について、昭和7年(1925年)操業、2006年閉鎖の織物工場の跡地有効利用からスタートした「まちなかキネマ」計画で、木造平屋、延べ面積1,558.12㎡の絹織物工場が市民の映画館「まちキネ」として生まれ変わるまでの紹介と、羽黒町手向地区の歴史的景観の保全に向けた取組みについて発表しました。

他県からは古民家再生から街づくりへと発展している事例や、14年かかって完成に至った事例、建て主様に納得してもらうためにお掃除ボランティアから始めて地道にコミュニケーションを取り続けている事例などの発表がありました。建築士として！住宅医として！私たちは歴史ある町並みや情緒ある古民家を安易に壊してしまうのではなく、再生し創り上げていくことの大切さを伝えていかなければいけないと確かめ合いました。

見学会では、明治創業時に復元された岩手銀行赤レンガ館、もりおか啄木・賢治青春館、旧岩手県立図書館・・・2日目は鉾屋町界隈～オガール紫波町～金ヶ崎町城内諏訪小路伝建保存地区～達谷窟西光寺～巖美溪とハードスケジュールで巡ってきました。

(西村山支部:大泉 みどり)



羽黒町手向井地区の絹織物工場が映画館に生まれかわりました。



岩手銀行赤レンガ館